感動と出合いの輪を拡げよう！ No.2
会報 蔵王
山形市蔵王倫理法人会
第40号
発行：平成22年3月1日

何を止めても御来客（おきやくさま）

研修副委員長　寺島俊一郎

研修副委員長、㈱丸俊の寺島俊一郎です。私は、洋服の卸業と、富士ヨット学生服の代理店、「まるごと山形」というインターネット通信販売をしている㈱流通研究所の3つの会社の代表を務めています。どうぞよろしくお願いいたします。

「繊維業界は厳しい、おまえは何やりたいんだ？」と父に問われ、大学3年のときに父が師と慕っている方に一緒に会いに行って相談したところ、その方が「これからはコンピュータ関係の仕事が良いのでは？」と言うので、父からは、「それならお前、それを自分で探してきて決めてこい」と言われ、就職先を自分で探しました。決まったのは富士通の子会社で2千5百人くらいのシステム関連の会社でした。そこでは、大学を出てからの5年間、本当に中身の濃い経験をさせていただきました。

しかしながら、いつかは山形に戻ろうという気持ちがあり、祖父の代からの会社を継ぐのだろうと思っていました。そしてそれが現実となり、いざ自分の会社に入ったら、今まで当り前にあったインターネット環境が全然ありませんでした。しかも文章は手書きが普通で、ワープロは全く使わない状況でした。私がパソコンに向かって仕事をしていると、「あの社長の息子一体何しているんだべ？」みたいな中で仕事をしていました。

そんな環境下、私は本業とかけ離れたインターネット通信販売をやることにしました。山形の食材や、お酒などをもっと県外に出すような仕事をして、最終的に山形に人を呼び込めるようなものしていきたいと思ったからです。半年間かけて、自分で調査をし、経営計画を立てて、一気に楽天の開店まで漕ぎ付けました。最初のひと月は2万5千円の売り上げで、しかもそれは親戚が試しで買ってくれたものでした。5年経った今は、リピーターも増え、お陰さまで楽天とヤフーと独自ドメインの3店を構えて頑張っています。

2年前に急に父が亡くなり、突然、私が3社全部をみる形になりました。そうなってみて、自分が何をしたら良いのかわかりませんでした。社長になったとはいえ、服の卸は業界的に厳しいし、従業員が30名以上もいる。まずは足元を固めないといけないので、どこか自分なりに学べるところはないか探しておりました。そこで会社に毎週FAXで講話の案内がくるけれど、倫理って何をしているのだろうと思い、MSに足を運んだのです。その初めて行ったMSがすごく面白かったので、朝行くといいことあるなあと思い、月1回参加位のペースで、行けるときに行くようになりました。

それから間もなくして池田会長から電話があり、「役員になってくれ！」「私でいいんですか？」「いいんです！」「ハイッ」と朝礼副委員長をお引き受けいたしました。しかし、その役目の重さも判らずに月1回参加は変わりませんでした。昨年9月から研修副委員長に変わりました。今度は講師を選定しないとけないという重責で、欠かさず毎回のようにMSに出るようになりました。

そして毎回出て気づきました！朝起きを習慣化すると良いことがたくさんあるのです。早起きが苦にならず、朝から大きな声で挨拶をするのが当り前になってきました。また、自分自身がとても元気になったとわかりました。

業界的にはずっと下がってばかりで暗いですから、小売店さんも厳しいとよく言うのです。でも厳しい、厳しいと言っていても何も始まらない。社是「何を止めても御来客」の精神で、倫理で学んだ、お客さんのためにできることは何かとか、常に感謝の気持ちを持って何かできないかとか、その辺の意識が、毎回のようにMSに参加するようになってどんどん変わってきました。

実は、父が亡くなって6日後に4代目になる息子が生まれました。2歳になれば、父が亡くなって2年経ったとわかるのです。息子は生まれて半年後から、保育園に通い、家でも規則正しい生活をしています。息子の生活に親が合わせれば夜は早く寝て、朝は早く起きます。月1回参加では、そういうことには全然気付けませんでした。朝起きるのが大変、なんか今日駄目だなあではなく、必ず行く！前の日の飲み会も控える！となって、純粋倫理の実践が生活の中心になってきています。

3月のMS

●3月6日（土）第302回
『私の人生を変えた世界初の事故』
講師：仙台はせくら倫理法人会
会長　深松 努 様

●3月13日（土）第303回
『富士研報告』
県研修委員長　小島　勤 様
蔵王相談役　鈴木隆一 様
蔵王専任幹事　金田雄介 様

●3月20日（土）第304回
『蒔かぬ種は生えぬ』
講師：（社）倫理研究所
東北副方面長　川又 久萬 様

●3月27日（土）第305回
『ユニバーサルデザインは何故必要でしょうか　ー誰もが暮らしやすい社会を実現するためにー』
講師：山形ユニバーサル・デザイン
結城玲子 様

一緒に倫理を学びませんか。只今、新会員募集中。
第40号
発行：平成22年3月1日

2月のモーニングセミナー便り

口腔と全身疾患について

あやこ歯科医院
院長　工藤理子 様

▼お口は全身疾患の感染源。口腔が引き金になる全身疾患は、歯肉に炎症があると、菌血症、敗血症、心膜炎、動脈硬化、心筋梗塞、脳梗塞。▼歯周病は第6番目の合併症であり、放置されたコントロールされていない歯周病は血糖値を上昇させ、糖尿病そのものに悪影響を与えます。▼口の中を清潔にすることが、肺炎を予防することにつながります。口腔ケアは機能の改善や、インフルエンザの予防にもなります。▼母親の口の中を歯周病や虫歯の無い環境にしておくことが、早産・低体重児出産のリスクを減少させ、さらに虫歯のない子供にすることに直結します。

楽しい旅のおもてなし

山交バス㈱
バスガイド　佐藤友紀 様

▼外が暑い時に、外に立ってお客様をずっと待っているのは大変です。そうすると、私、水が飲みたいなと思うのです。でも、お客さまは歩いて見てこられたわけですから私以上に絶対喉が渇いているはずです。手にPETボトルを持っているということは、やはりそういうこと。でも必ず皆さんが気づかれてPETボトルを買ってくるかというとそういうわけでもないので、きっとお客様は喉が渇いているのだろうなと思ってお水をお出しする。そうするとなんだか倍の笑顔が返ってくるような気がするんです。▼山寺でバスにお客様が帰ってきて「おかえりなさいませ。山寺はどうでしたか？大変でしたね」と感想を聞くのは誰でもできることです。でもお客様の顔を見て「大丈夫ですか？お水どうですか？」なんて言いますとね、「あら、いいの？頂けるの？」などと、どんどんとこちらの方を向いてくれたり、「いやあ、おいしいわね、このお水」「そうでしょう。山形のお水です、水道水ですけど」「あらそうなの？でもおいしいわねえ、このお水頂ける？」などと山形の水道水を欲しがるお客様はたくさんいらっしゃいます。▼そんな中でお水ってこんなにおいしいの？とか、山形って・・と、どんどんそのお客様が山形に興味を持っていただける。本当に小さなことでもチャンスになるのだとあらためて思う瞬間でした。そのひとつのおもてなしがさらに大きなおもてなしを生んでくれればなあと思うのです。

300回特別MS
平成22年度の山形市の施策について

山形市長　市川昭男 様

▼山形市は市制施行以来120年経ちました。120年と言いますと本当に長い歴史です。我々の先人達が築きあげてきた、この山形市の市長に就任して現在2期目をさせていただいておりますが、これまでの歴史を噛みしめながら、22年度の山形市の施策についてお話しさせていただきます。▼山形市の22年度の予算ですが、一般会計で811億円という予算をあげさせていただきました。昨年度に比して6．3％の増です。こういった時勢ですから、市民が最大限元気が出るような予算をとらせていただいたつもりです。▼その使い道の例として、子育て支援では、子供手当の支給、待機児童解消のために民間の保育園を3園建設支援、保育ママ制度の拡充、民間の認可保育園運営費の補助、夜間と休日を統合する3師会と行政が一体となった医療施設の計画、ママと子供が、車で出かけて、車を置いて天気が悪くても遊べる施設を嶋地区に作る構想。▼環境にやさしい街づくりのために、7月からゴミの有料化。▼中心市街地における、御殿堰の親水空間、第一小学校旧校舎の耐震保存工事。▼予算の話以外で、今回バンクーバーオリンピックでの加藤譲治選手の快挙を讃えて山形市の「スポーツ栄誉賞」を新たに創りまして褒賞させていただくことになりました。

揚げ餅

会長の元気、モチアゲな話 第6回

さわやかな心で

オフシーズンの雪のない晴れた日のゴルフ場はスルーで安くプレーができます。お茶、コーヒー、お湯などは準備されてますが、食事や風呂はありません。そのため途中のコンビニでおにぎり、パン、バナナ、カップ麺、飲み物などを準備していく方が多いようです。

先月末誘われて寒い中プレーしてきました。ゴルフってマナーが基本なのですが、テイグランド周辺のいたるところにその飲んだり、食べたりにした後のゴミが置かれています。ビールの空き缶が数本かたまって置かれているところ、カラスでゴミが散乱しているところなどもあります。そんな中、自然に持っているビニール袋に空き缶やゴミを拾っている、数年前までは考えられなかった自分がいるんですね。振り子の振り幅と言う教えがありますが、良いことをした分スコアのほうは上昇気流？とまでは行きませんでしたが、さわやかな、清々しい気持ちでプレーできたことは言うまでもありません。

物の整理はこころの整理、感謝をこめて後始末。今日も心を先行させ、さわやかなスタートを切っていきましょう。（蔵王会長　池田修一）

広報委員会事務局／〒990-0835　山形市やよい二丁目1-47　ダイヤ45　202
TEL. 023-647-5582　FAX. 023-646-7660
http://www.yamagata-rinri.net/

実践を普段着

（社）倫理研究所　常任理事
普及本部長　中西　浩　様

平成二十二年二月二十七日
山形市蔵王倫理法人会
経営者モーニングセミナーにて

おはようございます。早朝の３５分程頂戴をしまして、「実践を普段着」ということで、その一端についてお話させていただきます。

最近千葉県の方に参りますと、次のようなスローガンを皆さんが唱えていらっしゃいました。「長太郎より３０年、千葉より発信」というようなスローガンでございました。

この倫理法人会が昭和５５年の１０月の１日に千葉の船橋を中心としてスタートを切ります。その立役者でありましたのが、滝口長太郎っていいます。中華飯店ならびに当時は飼料の方のお仕事、そしてゴルフ場の経営をなされていらっしゃいました人物であります。個人的にも、大変この長太郎さんにはお世話になりました。いろんな意味で導いていただいたのではないかと思います。

年齢的にも丁度３０に手がそろそろ届こうかというような当時私、年齢でございまして、今でも千葉に参りますとスーパーバイザーならびに会員理事の方を引き受けていただいています長橋さんの方から時々言われますのは、「中西先生くらいですよ」と言うのですね。「何が？」「長太郎と呼び捨てにしたのは！」「そんな失礼なことしましたかね？」と言いましたら、「いや、よくやっていましたねえ」と言うんですね。確かに若気の至りでありますけれども、この長太郎さんをよく怒鳴っていたことがあります。「オイッ長太郎！やる気があるのか！」とですね。

というのは当時まだ法人会が立ち上がる前でございまして、たまたま昭和５２年から３年ほど千葉県の方の、個人の方の担当をやらせてもらいました。その後法人会が立ち上がっていく形になりました。

たまたま、昭和５２年の６月ぐらいでしたか、亡くなりましたが、直属の上司であった川崎康雄というのがおります。

ちょっと声がかかりまして、「中西君、９月の新年度から千葉県の担当をしてもらうから」とこういうふうに上司から言われたわけですね。その後「最近千葉の西船に、中華飯店をやっている滝口長太郎というなかなかユニークな人物が出てきた。中西君、これはね、一流の人物だからね」

こういう話を実は川崎から言われたのですね。通常は９月に入ってから千葉にお伺いをして、本来自分がやるべき仕事をその中でやらせていただくわけですが、実は川崎の方から「中西君ねえ、９月になる前に一度長太郎と顔を合わせて話をしている方がいい」

それは一流の人物だからという思いもあったと思います。普段は、それぐらいの話で時間をやりくりしてわざわざお会いしに行くということは当時ございませんでした。ただその時妙に行こうという気になったのは、この一流っていう言葉が引っかかったんですね。川崎が一流と認めている人物はどの程度のレベルなのか。

というのは私自身、人物評価で自分なりのモノサシを持っていました。まあ、今思うと大変生意気な話なんですが、それは人様には当然言えるような話ではありませんけれども、お会いする方々を上・中・下というように分けて使うんですね。

当然上・中・下には一流にも上・中・下という３段階があって、ですから三流の下までなりますと９段階目になるんですね。９じゃちょっと収まりがつかないので、１０というのをですね、１０番目はクズというのを作っていました。

お会いするとこの人は二流の中だなとかですね、一流の下だなと勝手にそういうようなモノサシを持っていました。

それだけに川崎が無造作に言った一流というのがひっかかったんですね。川崎はどういうモノサシで人物を評価しているのだろうか、ですから長太郎という人物よりは川崎のモノサシを知りたくて、お時間を長太郎さんからいただいてお会いしにまいりました。

長太郎さんと二時間くらい社長室でお話をやらせていただきましたが、どう考えても自分のモノサシからいうと一流じゃないわけです。二流の中だなあ・・・とですね、甘く考えても二流の上かなあと一流にはかなり厳しい条件を当時私は持っていましたものですから、どこから考えても一流じゃないわけです。ですから、心の中で川崎が持っているモノサシというのは甘いなあと思って、この程度が一流かとですね、もちろん長太郎さんに、「あなた二流の中ですよ」なんて失礼なことは申し上げられませんので、自分なりに川崎の一流の大体のレベルというのが判ったなあというようなそういう思いで、「では９月の１日からこちらの方お世話になります」と言って失礼をしました。

長太郎さん、エレベーターのところまでわざわざ見送りに出てもらいました。エレベーターの中に入りまして、「お世話なりました」って言いましたら

当然長太郎の方も、エレベーターの外の方から「ご苦労さまでした」とそういう挨拶を交わしました。

それであれば多分二流の中という自分なりの評価で、その後長太郎さんとのお付き合いが始まったと思います。

実は、エレベーターが閉まる瞬間、長太郎がある一言をポッと言ったのです。その一言を聞いた瞬間、ああこれは一流かもしれないなあと、二流の中から。突然一流にその一言でポッと変わりました。

その一言は、なんという言葉だったのか、「さようなら」という言葉だったんですね。

エレベーターが閉まる瞬間に「さようなら」とおっしゃいました。何年ぶりに耳にした言葉だろうと私はですね、日常私たちは「さようなら」という別れの言葉をまず使いませんね。普段こうやってお会いしましても「ご苦労様」とか「またお会いしましょう」とか、若い方々でしたら「バイバイ」とかですね、まあ何語かよくわかりませんがよく自分の気持ちは表現されていると思います。

「さようなら」という言葉は多分皆さま方も耳になされる機会は少ないと思います。今日のモーニングが終わりましたら、多分「さようなら」と言いましたらですね、「あいつ死ぬのかなあ」、「何かあったのかなあ」とですね、末期の別れみたいに、もう暫くお会いすることもないんだろうなあという、こういう響きがありますね。

十数年前ＮＨＫが視聴者から『美しい日本語』ということでアンケートをとりました。なんと第二位だったのが「さようなら」という言葉でした。

多くの視聴者の方々が美しい日本語の中で第一位にお選びになったのが「ありがとう」。まあこれはどなたでも解りますね。多分日本語の中で一番美しい言葉は「ありがとう」です。これには私も異論はありませんし、そうだなと思います。

ただ、二位に「さようなら」という、今どちらかと言えば死語に近い言葉です。普段使わない言葉です。これが、多くの方々が二番目に支持した美しい日本語だったんですね。これは正直意外でした。へえこの言葉が二番目なのかと。

その後に「おはようございます」とか、「いただきます」とか、「はい」とかですね、そういう言葉が続いておりまして、まあ確かに死語に近い言葉かもしれませんけれども、しかし美しい響きを持った言葉がやはり「さようなら」だなあと思いました。

だからこの「さようなら」という言葉がですね、その長とってつくった言葉じゃなかったんですね、その長太郎が発しましたのは。これは普段、日常の中で、これでもか、これでもかと、使って、使って、使い切った言葉だったので、そういう言葉でしたから自然にスッとこちらの心に入ってまいりました。

これだけの言葉を、こうやって口に発することができるという人は生半可な人物じゃないなあというのが、突然一流にポッと格上げをしてしまったということです。

実は、その後長太郎さんと付き合って、当時の長太郎のあだ名が『さよなら長太郎』っていうとにかくめたらやたら人に会いますと「さよならー」とやるわけです。

これだけ使っていると、この言葉は力を持つようなあと思いました。ですから日常使わない言葉を、改まったところでお使いになっても、その言葉は生き生きしないですね。普段使っていっらっしゃる言葉を使ったときに、その言葉というものは力を持っているものであります。

まあ、皆さま方でもいろんなお祝い事に声がかかって、出ていかれて、時にはスピーチなどを頼まれて、お話なさる機会もお有りだと思います。なかなか改まった席に行きますと、普段使わないような言葉でしゃべろうとしますね。ですからつい噛んでみてしまったり、滑ってしまったり、思うように自分が言おうとするものが相手に伝わらない場合もあります。

結婚式などにお呼ばれして、出かけて行きまして、スピーチを頼まれることがありますけれども、「短くていいか」と言って前もってお願いします。「一言でいいよな」とですね。

要は「おめでとう」と、これを言いたいがために前後に言葉をくっつけているだけで、要は「おめでとう」という言葉を強調すればいいのですね。前後は要らない言葉だと思います。

それが長々と、いろいろと、うんちくを傾けて、教訓を垂れるようなお話を聞きますと、おっしゃっていることは間違いじゃないし、その通りだと思います。

夫婦というのはこういうもの、お互いに良い時も悪い時もある。しかしそういう時に心寄せ合ってという話を聞いておりますと、『自分がやれないことを言うな！』と思わずそういうような気持ちで聞いている自分というのがそこにいますね。

だからようやくスタートを切って、いまから楽しい人生が始まって、最高の晩に今いるのに、まあ、いろんなことをしゃべる必要は無い。とりあえず「おめでとう」とですね、まあ今後苦労はあるかもしれないけれども乗り切ってくれ、それで十分ではないかといつも思うのです。

それが延々とやられますと、何をしにこの人来たのかなあとですね、まあ実は同じテーブルに、スピーチを頼まれている方っていますとね。普段あまり

場馴れをなされてない方なんだろうと思います。一生懸命原稿を書いて準備されてきています。ですから料理が出てきましても、自分のスピーチが終わるまで、気になって、なかなか料理にスッと箸が出ない、時々テーブルの下から確認をされています。

大変だなあと思います。ですから「失礼とは思いますが、申し訳ないけどね、主賓のスピーチや、乾杯まではまだ飲んでいないから皆辛抱して聴いているけれども、乾杯後のスピーチはね、ほとんど誰も聴いていない。聴いているのは身内か、同じテーブルに運悪く座った人がお付き合いで聴いているだけです。通常聴いいておりません。簡単にやった方がいいですよ。」

これは、つまらないおせっかいかもしれませんが、しかし当人は、それなりのお話をしなければならないということでいろいろ準備なされています。

意外と結婚式のスピーチは後になるほど不利なんですね。ハッキリ言いまして、主賓をやらせていただくっていうのが一番楽なんです。まだ白紙ですから、誰もしゃべっていませんから何でもしゃべれる。

後になると前でどんどん使われてしまうんですね、いろんな逸話を。先程もお話がありましたようにと断りながらですね、最後になればなるほどしゃべれる逸話というのは少なくなるんです。ですから後半に当たっている人は気の毒だなあといつも思います。

主賓と言われまして後でいいよとお断りになられる人がおられます。そうじゃなく主賓が一番いいんですね。何でも言えるという白紙ところで自分で描けるわけですから。

そういう中でようやく順番が回ってきて、じゃあ誰々さん。お立ちになった瞬間に頭が真っ白になって準備していた始めの言葉が出てこないんですね。

こういうお姿を見ますと普段しゃべっている言葉で話されるとススッと言葉というのは出てきますね。

この長太郎の「さうよなら」も普段着レベルまで引き下ろしていた言葉でしたから、聴く者の心にスッとそれが溶け込んでいったのだろうと思います。

法人会がスタートを切りまして、丁度30年という歴史を刻もうとしておりますけれども、滝口さんを通して学んだことというのはたくさんあります。

人間というのは亡くなりますといい思い出だけがずっと残ってですね、ですからよく千葉にまいりますと、長太郎さんを美化しないように、神格化しないように、「物凄い長所もあったけれども、ちょっといただけない欠点もあったよね」って言うんです。

「人間であるからには、両面持ち合わせている。だからその欠点を努力しながらよりよい方向に持っていこうというのが人の生き方であって、パーフェクトな人なんて世の中にいないよ」って言うんです。

それがいつの間にかパーフェクトな形で持ち上げてしまうというと「本人も草葉の陰でくしゃみしているんじゃないの」とこう言いたくなるときがあります。

よく長太郎の家に月に2、3回泊っていたんです。当時はホテルとか旅館に泊めていただけず、会員の皆さま方がそれぞれのご自宅を開放して一晩泊めていただいていました。ですから月に2、3回長太郎さんの家に泊めていただくということがありました。

中々面白い方でございまして、夜の11時12時まで話し込むことが度々ございまして、そしてそれはいいのですけれども、「長太郎さんもう12時近いねえ、明日の朝も早いから休もう」。

当時は朝5時からの今で言うところの家庭倫理の会の組織ですから。ですから少なくとも4時くらいに起きて準備しないと5時からの集まりには間に合いませんのでそろそろ休もうかと言って床に就かしていただきます。

いつも泊めていただいた部屋の隣が仏間で、廊下越しが風呂なんです。ご夫婦お2人で8部屋ある。そういうお宅でございました。

実は風呂の前の部屋にいつも休ませていただくのですけれども、3時半くらいになりますと風呂場から異様な音が聞こえてくるわけです。「ひとつ、水に感謝して！」と禊をしているわけです。それで月2，3回泊ると毎回ですよ。凄いなあと正直思いました。

だって日中は分刻みでお仕事をなされていた時代ですから超々多忙です。その方が12時くらいまで一緒に付き合ってもらって、それが3時半には「ひとつ、感謝して！」と水をかぶっているわけです。

長太郎にはちょっと実践的には敵わないなあと、研究員の中でも彼のようにやれる奴はそんなにいないなあと、1回2回だったら別に驚きません。3年も宿泊しているわけですから、しかも月2、3回。それがずーっと毎回です。毎日なされているわけでしょうから。

ですから、毎日3時半に水をかぶってという生活ができる人というのはそんなにいない。1回2回だったらやるかもしれませんけれども、季節も夏から秋、冬に入ってかぶる水もだんだん冷たくなってい

く。それをいつ泊っても3時半くらいになると音が聞こえるわけです。

それが終わりまして、隣の部屋に来まして、二男さんが若くして亡くなりまして、その前で般若心経をおあげになって、隣にふすま1枚で寝ているものですから、寝ているわけにいかないんですね。いつもそうやって水の音で目覚めるんですね。

のこのこ起きてみますと、起こしているくせに「先生、起こしましたか？」そういう生活でした。凄い人だなという思いがずっとありました。

奥様がまつえさんとおっしゃいましたが、たまたま、まつえさんと二人で話をしていました。どういう拍子かその話が話題に出たんです。「いやあご主人凄いねえ。毎朝3時半に必ず禊をなされているようだけれども、あれ毎日の事？」これは疑う気持ちはこれっぽっちも無いですよ。毎日の事？と思わず口から出たわけですね。

そしたら奥さん「いや、先生が来た時だけです」。てっきり毎日だと思い込んでいますので、私聞いた途端「エッー？」と思ったのですけれど、なかなか役者でございまして、ひょうきんなところがございました。

これは、当然と思ったのは私だけではなくて他の連中も泊ってますから、月に7日か8日くらいはかぶっていらっしゃると思いますが、ですから他の仲間と話しても「長太郎は凄いねえ」「凄いねえ」と言いますから、私も「いや実はこうだよ」と話をする気はありませんから、「凄いねえ」と言ってですね、まあ、なかなか人を食ったようなところがあったですね。

しかし非常に好きでした。個人的には欠点もたくさんありました。それがまた妙に溶け合っている部分がありました。

ですから昨日もちょっとお話をしましたけれども、皆さま方もいろんな『くせ』を身につけていらっしゃいますね。

『くせ』というのは不自然なもの、自然でないものですね。しかも一日二日で身に付けたものは『くせ』とは言わないです。『くせ』というのは何年も時間を繰り返しながら身に付けたもの。

「あの人は強情だよねえ」と、その強情さがなんとも言えない強情さでして、30年40年時間をかけて磨きあげて身につけてきたものですから生半可でこれは直らないですね。

ですからいつもご年配の方に申し上げますが、もう年配者の方は欠点を改めるという無駄な努力はしないこと。欠点は欠点で認めてそのまま横に置いておきなさいと言うのです。若い人だったらまだ欠点も改める時間があるのです。しかし年配者はもう時間が無い。ですから欠点は横に置いておきなさい。

ただ長所は限りなく磨いていく。長所はどんどん高まっていきます。欠点というのは周りの方はあまり気にならなくなります。無くなるわけじゃない。欠点は欠点として残っているのですが、長所が欠点を凌駕していくということがあります。

ですから大いに自分のいいところをですね、ある程度の年齢になったら切り替えた生き方をしていかなきゃいけないなと思います。

お名前拝借するとあれですけれど、○○○さんあたりは無理ですね、見ていると。いろんなくせを持っていらっしゃいますけれども、もう長所を伸ばせばいいと思います。欠点はそのまま置いて。

そうするとまた欠点が妙に魅力が出てくる。欠点が欠点でとどまらずにそれがひとつの魅力になってくるという面もあります。

人というのは両面持ち合わせているというのが普通ですから、また、そこに限りない人と接していく中で興味をかきたてられるものというのがいつもございますけれども、大事なことは『実践』を『晴れ着』の段階から『普段着』のレベルに引き下げていくために、日常の中で繰り返しこれを使いきらなければならないという面があります。

反復連打していくということが求められますね。毎日、毎日、これでもか、これでもかと。そうしますと少しずつ自分の身についてくるのです。ただ、やれる日もあるし、やれない日もあるし、その繰り返しですが諦めずにずっと繰り返していると段々自分のものになってきます。

長野の方の経営者に、1日に「ありがとう」を3万回おっしゃる人がいます。ちょっと桁はずれの量ですね。

もうのべつ幕なしに「ありがと、ありがと、ありがと、ありがと・・・」ですね。どのくらい時間がかかるかといいますと大体6時間くらいかかるんですね。

車のハンドルを握っている時が一番言えると本人は言います。運転しながら「ありがと、ありがと、ありがと、ありがと、ありがと、ありがと・・・」とですね。確かに言えるのだろうと思います。

これはひょんなことから始まったんですね。会社が傾きまして、ちょっと難しいなあという状況に経ち到りまして、当時「ありがとう」と言うのが流行っていました。百回とか稀に千回というお話を耳にすることがありますがまさか3万という桁外れの数はですね、まあお会いしたのは初めてでした。

とりあえず1日3万回です。3万回言ったかどうか自分で確認するためにカウントをカチカチ取って

いるわけです。やりすぎて腱鞘炎になったりしています。

お話をしながら「申し訳ないけど3万回言っているって、本物いくつあるんだろうねえ、社長悪いけどね、ひとつも本物は無いんじゃないの？」とですね、数さえ言えばいいの？と憎まれ口を叩いたこともありましたけれども、続けていると違いますね。

実は会社も非常に厳しい状況だったのですけれども地元に超々優良企業があるのです。彼は「タダで結構ですからお仕事やらしてもらえないでしょうか」と表から営業をかけました。

それは何故かというと、そこの仕事をしているということは物凄い信用ですから。ですから他の仕事がいただけるんですね。あそこに入ってんの？あそこの仕事してんの？とね。

ですからタダでいいんです。やらしてもらっているということがわかれば、他の仕事がいただけるんです。

タダでもやりたいんですが当然相手さんは相手にしてくれるようなところではありませんので、お付き合いは無いです。

そういうような超々優良企業が地元にあるのですが、たまたまそこから仕事がドンと来たんです。

彼にしてみれば何で自分のところに来たんだろうでした。それも彼のところにすれば約半年分くらいの売上に相当する仕事でした。

タダでもやりたいんですよ。永年そう思っているそこからお金まで頂戴して、しかも半年の売り上げに相当するようなお仕事を、なんのつながりもないところでドンと来たんですね。

本人にすれば「先生、ありがとう、ありがとう。これが引っ張ってきた」と言うんですね。まあ嬉しくて、嬉しくて所かまわず言っているんですね。「ありがとうと言っているとこんなことが」と。

一時期、群馬、長野、栃木で経営者の方と会っていますと、それから話聞いた連中がみんな「ありがと、ありがと、ありがと、ありがと、ありがと、ありがと・・・」を始めました。

なんかいいことあったかねと聞きましたら何人かありましたね。ある車屋さんなんか女の子2人。次女が全然男っ気が無い。化粧もしないで、私がお父さんの跡を継いで車屋をやるとですね、整備工場ですから。

「先生ね。一度でいいからこの娘を嫁に出したい。帰ってきていいから1度は嫁に行ってほしい」という親爺としての切なる夢を持っているのですが全然その気がない。

それが、「親爺がありがと、ありがと、ありがと、ありがと、ありがと、ありがと、ありがと・・・と言い始めたら、突然秋に嫁に行く！と言っていなくなったんですよね」と言うんですね。

まあこういう話とかいろいろ聞かされる。言葉の持っている凄さっていうか、これが環境を変えていくのも反復連打していかないとやはり力が無いんです。

思い出して突然やるのではなくて、毎日毎日繰り返して言っていると不思議とそういうような立ち居振る舞いになっていくし、また、そういうようなものが全身から出てくるようになりますね。

ですからプラスの言葉をずっと吐き続けていると、やはりそういうものを体から発せられるような形の人になっていくんです。

人の悪口ばっかり言っていると段々そういうような顔つきやそういうようなものを知らずに引きずっていくような自分に落ち込んでいきます。

ですから足元の何気ないようなひとつひとつをどうやって普段着のレベルにまで引き上げていくかです。

ですから、挨拶ひとつにしても、されど挨拶といつも思いますね。本当に挨拶1個でも周りを変えていくことができる。返事1つでも周りを変えていくことができる。やはり聞くだけで環境が変わっていく面がありますね。

宮崎県の都城市に柏田良丸という人物がいました。彼は「ハイ」という言葉で何と2億円を超えるお仕事を頂戴した、そういう人物です。

ハイの柏田と言われているようなところもありますが、たまたま業界の表彰式がございまして、30名位の方々が表彰されました。

当然表彰者は会場の前列の方にいらっしゃったのだろうと思います。社名とお名前をよばれますと皆さんお立ちになりますね。ほとんどの人が黙って立ちますね。○○株式会社○○さんと呼ばれて黙ってお立ちになる。

お立ちになったのが当人ですから周りにはわかりますけれども、ただ、柏田さんのところに到ってですね、「株式会社菱友、柏田良丸社長」と言われた瞬間に「ハイッ！」と言ってお立ちになる。

周りが一瞬奇異な目で変な奴とですね、今そういう時代で、返事する人が変な人なんです。黙っているのが普通なんですね。おかしな時代だと思います。

終わりましてパーティになったときに彼の規模から考えると当然取引などできない日本で1、2と言われる大所さんの社長がやってきて名刺交換をしてくれと話しかけてこられた。

「今度九州の方にちょっと所用で出かけるのだけれども、もしよろしければ足延ばして会社を見させていただきたい。さっきのあなたの「ハイ」に感動

しました」。

これがきっかけで年間2億を超えるような仕事をそこから頂けるようになる。「先生ね、面白いねえ」って言うんですね。

「たった2文字で、言葉にすれば0．何秒だよ。それで2億の金が、お仕事が頂ける。世の中って面白いねえ」ってね。

見る人は見てるし、また感ずる人は感ずるもんだねと思います。

ですから柏田さんも日常から「ハイ」というものをなされているのがたまたまその場ででたというだけで、取って付けたような返事では無かった。ですから力が有ったと思います。

ひとつ足元から実践を始めていただきたいと思います。外ではみんな頑張ってやりますが、家を一歩外に出ますと物凄くにこやかになってみたり、会社から一歩出てお客さんのところへ行くと実に物わかりのいい経営者になられる。

しかし会社に帰ると苦虫噛みつぶしたようにして社員が社長さんと呼んでも返事もしない、笑顔も見せないとか、しかも社員の方が外から今日は本当にくたびれたなあと言って営業なんかやって帰ってきますと、ご苦労さんだったねとねぎらいのひと言ぐらいかけてやればいいのにですね、大した働きも無いのにとかですね、悪いように悪いようにと明るく受け止められない。

ですから言葉の端々にちょこっと、ちょこっと出がちになるわけです。ひとつプラスのものを、肯定的なものを表に出しながら多くの方々に接していかれることを、これを普段着にしたものがどんなところにも使えるものだと思います。

倫理の実践というのは、この反復連打していくところに魅力があります。ますます実践が高まっていきますように心から念じましてお約束の時間がまいりましたので今朝は以上でございます。ありがとうございました。

池田修一会長の
元気モチアゲな話　番外編

挨拶、返事、後始末

職場には毎日のように様々な方がこられます。皆さんの職場でもそうでしょうが、新聞配達さん、ヤクルトおばちゃん、郵便やさん、保険やさん、運送やさん、銀行マン、お取引先、どなたさんでも声をかけ挨拶をしています。

昨年度全国の拠点を回っているメーカーの方が来訪され、東京本社に戻ってからメールをいただきました。

販売台数も売上金額も大都市部のところから見れば比較になりませんが、「日本一のリフト販売店だ」と言うのです。

お世辞も入っているかと思いますが、グループの全国の販売拠点は二百数十箇所あるなかで、一番元気な明るい挨拶で感動したということでした。

我が社よりしっかりとやられているところは沢山あり恥ずかしいところですが、挨拶ひとつでも日本一になれるのですネ！

早速朝礼で、みんなの気持ちよい挨拶で「日本一のリフト販売店と言われたぞー！」と報告したところです。

挨拶、返事、後始末が自然と職場で実践、習慣化されることにひそかに期待です。

我が社の朝礼の締め言葉は、本日も、明るく、元気に、積極的に仕事をしていきましょう！です。

ありがとうございました。

それでは解散します。

ハイッ！